平成２５年度研究成果報告書《平成 25 年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	34	都道府県・指定都市名	広島県
学校名（生徒数）	広島 県立 福山 明王台 高等学校 （916人）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：〒720-8502　広島県福山市明王台二丁目４番１号
電話番号：084-952-1110
研究内容等を掲載しているウェブサイトの URL：
http://www.fukuyamamyoodai-h.hiroshima-c.ed.jp

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：４高等学校
○研究対象教科等：外国語（「コミュニケーション英語Ⅰ」）
○研究のキーワード：「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標，総合的なコミュニケーション能力，言語活動，タスク，組織的な取組
○研究成果のポイント：
①「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標に基づき，担当教員が各単元の目標を達成させるために必要なタスクを考え，共通のワークシートを用いて言語活動を行うことで指導内容・方法を共有することができた。
②「聞くこと」，「読むこと」から「話すこと」，「書くこと」につながる言語活動を行うことによって，生徒が積極的に言語活動に取り組むようになり，その結果，４技能の総合的なコミュニケーション能力をバランスよく育成することができた。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

４技能の総合的なコミュニケーション能力を育成するための「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に基づく指導と評価の改善

（２）研究主題設定の理由

これまで本校の外国語科教員の多くは，文法事項を具体的な使用場面における言語活動と切り離し，知識を詰め込むことに焦点化した授業を行ってきた。また，音声を単に聞き取って練習したり英文を復唱したりするなど，目的が明確ではない活動が少なからずあり，生徒のコミュニケーション能力を育成するまでにはいたっていなかった。

このような指導から，４技能の総合的なコミュニケーション能力を育成する授業に転換するため，「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標とそれに沿った年間指導計画及び単元計画を作成し，４技能を統合的に活用する言語活動を通した指導と評価の改善を図ることを目的として研究主題を設定した。

（３）研究体制

本事業の指定を契機に教科会を時間割に組み込み，毎週定期的に研究の進捗状況を確認した。授業で行うタスクの作成については，教科会で研究を進めるとともに，必要に応じて外部有識者や広島県教育委員会事務局高校教育指導課の協力を得ることができるように連携した。

（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	□本校独自の「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標を設定。 □設定した学習到達目標に基づいて，年間指導計画及び各単元の指導で活用するタスクの工夫・改善を行うために校内研究授業を開催。 □文献研究を行うとともに，本県の英語力強化に係る拠点校（広島県立尾道東高等学校）における実践や研究成果を本研究に生かすため，公開研究授業に参加。 □県内の外国語科教員の参加のもと，教諭２名による第１回公開研究授業を実施。 □生徒が自分の考えや意見などを表現するタスクの工夫・改善の方法について研修し，教科会で単元ごとのタスクの設定に関して検討。 □「４技能の有機的な言語活動に結び付けるためのタスクの工夫」と題して，外部有

	識者による研修会を２回開催。 □県内の外国語科教員の参加のもと，教諭２名による第２回公開研究授業を実施。 □英語による思考力と表現力を問う定期考査問題を作成するため，問題作成に係る検討会を開催。 □生徒の即答力（返答までに要する時間の短さ）とfluencyを測るため，インタビューテストを実施。 □言語活動への取組に関して，生徒への自己評価アンケートを実施。

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

①「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に基づく学年共通の指導と評価

- 各単元の題材を吟味し，学習到達目標に基づいて，「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」を中心に年間指導計画を１学期中に作成した。
- 「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」を生徒に確実に身に付けさせることを可能にする単元計画を作成するとともに，それらの能力を適切に問う授業指導と一体化した定期考査問題を作成した。
- 年間指導計画及び単元計画に基づき，各授業で行うタスク及びワークシートを授業開始数週間前から検討し，第１学年８クラスを担当する８名の教員が共通認識を持って授業を行った。

② 言語活動を重視した指導方法の工夫・改善

- クラスルーム・イングリッシュを始め，英語で授業を行うことを徹底した。
- ペア・ワークやグループ・ワークを多く取り入れ，生徒が実際に英語を使って言語活動を行う場面を増やした。
- 英語で英語を理解するためのワークシート（Q&A，T/F Questions，要約文の穴埋め等）を作成するとともに，聞いたり読んだりしたことに基づいて自分の考えや意見などを話したり書いたりするタスクの作成に取り組んだ。
- 各単元の中心となる「頂上タスク」を設定し，そこから逆算して，それに至るまでに必要なタスクを単元計画に組み込んだ。
- 授業中の言語活動に関して，生徒への自己評価アンケートを３回実施し，その変容を把握するとともに，指導改善のための資料とした。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

- 外国語科内での検討会や情報交換の機会が増え，個々の教員の力量に頼る指導から，組織的・計画的に授業改善に取り組む体制へと移行することができた。
- 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に基づく指導を実践することで，各単元で身に付けさせたい能力が明確になった。
- ４領域の全てにおいて，「～できるようになった」と肯定的に自己評価する生徒が増加した。（４月と 11 月にアンケート調査を実施，「～できるようになったか」について４段階で自己評価した平均値：聞くこと：2.35→2.62，読むこと：2.51→2.64，話すこと：1.97→2.39，書くこと：2.27→2.50）。
- 生徒が，自分の考えや意見などを積極的に英語で表現することができるようになった（４月と９月にインタビューテストを実施：即答力で３段階評価の最上位評価３の割合 40.4%→55.0%，平均発話語数：9.2 語→18.8 語）。

（２）研究成果の意義等

「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に基づく指導と評価を柱とした組織的な授業づくりは,外国語科におけるコミュニケーション能力の育成に限らず様々なテーマについて応用することができる汎用性の高いものであり,シラバスの作成などにおいて他教科でも活用できる。

（３）指定期間終了後の取組

「CAN-DO リスト」の形で設定した各学習到達目標の妥当性を検証しながら，指導と評価の改善の取組を継続し，第１学年から第３学年までの３年間の指導のストーリーを構築する。